
プロジェクト報告

新文化運動と大正期日本の知識界

陳 繼 東
橋 本 秀 美

1. はじめに

1915-1925年の間、中国で発生し展開された「新文化運動」は、大正期の日本と密接な関係を持っていた。科学とデモクラシーの追求を掲げたこの「新文化運動」に対して、吉野作造をはじめとする大正デモクラシーの推進者からは連携の行動が示された一方で、この運動の中に現れた伝統否定の姿勢に対しては、儒教や仏教を研究し、「東アジアの」価値観とアイデンティティを重んじた日本の知識人から、厳しい批判も行われた。

本研究は、昨年度のプロジェクト「五四運動に対する大正期日本学者の反応」の継続で、本年度は特に上述した二つの側面から、大正期日本における、新文化運動に対する擁護と批判を更に広く探っていくこととし、2021年3月18日に、オンラインでシンポジウム「中国新文化運動と大正日本」を開催、六名の研究者の研究発表によって、新しい研究成果を示すことができた。

2. シンポジウムのスケジュール

日時：2021年3月18日(木)10:00~17:30

場所：Zoom オンライン会議

司会：橋本秀美（青山学院大学）

発表：

10：00～10：10 開会趣旨説明 橋本秀美

(1) 10：10～11：10 閻小妹（信州大学）：

「科学思考の伝播媒介としての文学：『吾輩は猫である』を再読する」

（小説作为科学意识传播的载体——重读《我是猫》）

(2) 11：10～12：10 張明傑（青山学院大学）：

「魯迅作品最初の日本語訳及びその伝播」（魯迅作品最早的日文译介与传播）

コメンテーター：李梁（弘前大学）

12：10～12：40 休憩

(3) 12：40～13：40 喬志航（青山学院大学）

「文化と政治——袁世凱の顧問有賀長雄の思索」（文化与政治——袁世凯顾问有贺长雄的思索）

(4) 13：40～14：40 陳繼東（青山学院大学）

「内藤湖南の五四新文化運動の認識——『新支那論』を中心として」（内藤湖南的五四新文化運動認識——以『新支那論』为中心）

(5) 14：40～15：40 陳力衛（成城大学）

「“五四新文学”とはなにか：明治文芸の残影」（什么是“五四新文学”？——明治文艺的残影）

コメンテーター：李梁（弘前大学）

15：40～16：00 休憩

16：00～17：30 講演会「梁啓超と『新文化』」

講演者：高柳 信夫（学習院大学・東洋文化研究所長）

コメンテーター：李梁（弘前大学）

司会：陳繼東（青山学院大学）

3. 発表要旨

閻小妹氏は「科学思考の伝播媒介としての文学：『吾輩は猫である』を再読する」というテーマで、夏目漱石の文学創作と科学知識の把握との関連性を論じた。この小説の中国語最新訳の翻訳者でもある閻氏は、本発表の動機を次のように述べている。夏目漱石のこの小説が出版されて十年後、中国でも文学革命や科学精神が提唱されるに至ったが、その時代の文学作品には科学の知識と方法を反映する要素が乏しかった。そのため、夏目漱石の『吾輩は猫である』は幾種の中国語訳が出されているが、科学との関連性という視点による解説は殆んどなされていない。そこで、閻氏は本発表のなかで、近代科学と明治大正時代の啓蒙運動、夏目漱石の科学知識の探究経歴及び科学知識の活用によってその文学性を豊かにしたことを具体的に論じた。

張明傑氏のテーマは「魯迅作品最初の日本語訳及びその伝播」である。大正時期に創設された『日華公論』や『北京週報』は中国で発行されていた日本語の雑誌と新聞である。月刊誌『日華公論』は1919年9月号に現代中国文学の代表者である魯迅の白話詩（口語新詩とも）「彼」を日本語に翻訳し掲載した。これは魯迅の文学作品の日本語訳の嚆矢となった。この事実は従来の研究では明らかにされてこなかったことである。張氏の論文はその経緯を明らかにする一方、これらの日本語誌による「新文学」の作品と新文化運動の紹介を詳しく考察している。

喬志航氏の発表テーマは「文化と政治——袁世凱の顧問有賀長雄の思索」である。近代中国の国家建設をめぐる、二つの相反する主張が存在し、それは孫文をはじめとする南方革命派による「人民革命建国」説と袁世凱をはじめとする北洋勢力による「統治権の移行」説である。後者の説の張本人は有賀長雄である。南方の革命勢力と対抗するために、大統領である袁世凱の顧問として、有賀長雄は国体の在り方が自国の歴史的状況と文化伝統に基づくもので、中国の憲法では孔子の教えを国家の根本と規定しなければならないと主張する。本論文では有賀長雄の主張を詳しく考察すると同時に、この二つの国体の説は現在中国にとっても依然として未解決問題となっていると指摘されている。

陳継東の発表テーマは「内藤湖南の五四新文化運動認識——『新支那論』を中心として」である。『支那論』（1914）では、帝政の復辟への動きの見られた時流の中で、帝政ではなく共和制こそが中国の方向だと的確に断言していた内藤湖南であったが、『新支那論』（1924）では、新文化運動及び五四運動に対して、中国社会と歴史の構造・方向に違背するものとして否定・拒否の態度を示した。陳論文では、内藤湖南の新文化運動

認識は具体的に如何なる内容のもので、どのような根拠に立つものであったのか、そして現在そのような認識は如何に評価されるべきか、といった問題について考察している。

陳力衛氏は「“五四新文学”とはなにか: 明治文芸の残影」で、近代中国における「文学」概念の中身とその変遷、および日本での「文学」規定との関係性を考察した。それによれば、中国では「文学」は『文学兴国策』（1896）においては文系理系を問わず、すべての学問を包括する概念であったが、『普通百科新大词典』（1911）に至ると、政治や自然科学（格致学）の独立によってその内容が縮小した、代わりに「教育」が総合的な概念として登場した。その後「新文学」としての「文学革命」によって、「文学」が近代的な変貌を遂げた。その変化の歴史に存在する日本の影響が明らかにされている。

高柳信夫氏の講題は「梁啓超と「新文化」」である。従来の五四運動前後の中国で展開された「新文化運動」の研究では雑誌『新青年』に深く関わった人々の系譜のみが突出した存在であるかのように多く描かれることに対して、当時の「新文化」建設をめぐる議論の多様性にも注目すべきという反省を踏まえて、1915年以降、梁啓超の思想的営為も有力な「新文化」建設の試みの一つとして見逃がしてはならないと指摘し、この時期の梁啓超の「新文化」についての議論を取りあげて、特に渡欧前後（1918年12月から旅を出て20年3月帰国）の主張の変化を詳しく考察している。

結び

今回のシンポジウムを通して、「新文化運動」と大正日本との関連性を多岐にわたって探究することができ、日本との深い関係が明らかにされた。現代中国歴史の転換点ともいえる「新文化運動」は決して自国に限って発生したものではなく、東アジアの歴史ないし世界史の変動中で起きた現象として捉えなければならない。